



Title	<書評>『カフカの長編小説』林寄伸二、村上浩明編著 インプレスR&D 2021年
Author(s)	三谷, 研爾
Citation	独文学報. 2022, 38, p. 75-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103075
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

『カフカの長編小説』

林寄伸二、村上浩明 編著

インプレス R&D 2021年

三谷研爾

本書は、西日本を中心にきわめて長期にわたり活動を重ねてきたカフカ研究会の新たな成果である。この研究会は1985年に『カフカと現代日本文学』（同学社）を刊行したのを皮切りに、共同研究にもとづく論文集をコンスタントに世に送っており、評者もそこから多くを学ばせてもらってきた。文学研究ひいては人文学研究を取り巻く環境が大きく変わるなか、その6冊目に当たる本書の刊行を実現された同研究会の息の長い活動になにより心から敬意を表したい。

本書が取り組んでいるのは、長編小説『失踪者（アメリカ）』『訴訟（審判）』および『城』を、ここ20余年の研究動向を踏まえてあらためて読み直す作業である。むろん評者には、この間のカフカ研究のさまざまな動きを概観する用意はないが、テキストが校訂版全集 kritische Ausgabe = KKA (1982-) の登場によって議論の基盤が大きく変わったことだけは押さえておきたい。いまや歴史的な存在となったマックス・ブロート編集の旧全集は、生前未発表の原稿からなるべく多くの「完成作」を取り出すことを眼目にしていた。そのためにブロートは草稿を作品と断章に積極的に切り分け、前者にはタイトルを付与することでカフカの文学をより整序された、立体的な世界として読者に提示したのだ。それにたいし校訂版は、ブロートによる整序が——『訴訟』の章立ても含め——じつは仮設的なものにすぎず、実際の草稿が切り分けのむずかしい、混沌たる姿にあることを教えてくれる。従来、独立した作品として読まれてきた小品や断章が、テキストのそうした状況から再考されねばならなくなった。その議論をくぐり抜けたところで今いちど長編に焦点を当てようというのが、本書の企図といえよう。

合計14篇の論文を収録した本書は4部からなり、第1部から第3部でそれぞれ『失踪者』『訴訟』『城』を順次取り上げて、作品論を3篇ずつ配している。これにたいし第4部は、カフカの長編全体に共通する側面に光を当てるもので、議論の

重点はその言語表現ないし形式に置かれる。しかし以下では、評者の問題関心にしたがって、本書全体を横断するかたちで紹介を試みたい。

*

カフカのテキストはいかにして語りうるか——無理を承知で一般化するなら、問題はなにを参照することで対象テキストを論じるかに帰着する。そのさい一方の極をなすのはテキストそれじたいである。閉域としてのテキストの世界をターゲットにして、もっぱらその内的特性を明らかにする、すなわちテキスト自身を参照する方向である。その対極にあるのは、時代を同じくするものであれ、時空を大きく異にするものであれ、ともかくコンテキストを参照する方向だろう。これらふたつの極のあいだに、書き手の生活史を引照し、日記等から推定されるその意識生活や心理的機制をも探る、また彼の他のテキスト群との関連をさまざまに措定する行き方がある。このように、語られるべきテキストとその参照項のあいだには、いわば遠近の差がある。いくつかのアプローチを組み合わせる、つまり対象テキストに向かい合うときの距離を巧みに操作することで、さらなる接近を試みる場合ももちろん少なくない。

このように考えるとき、本論集にあって、遠いものを参照する姿勢がもっともよく窺われるのは林寄伸二「カフカとアメリカ先住民オヒエサ」だろう。ここでは、カフカが『失踪者』執筆にさいして読んでいたかもしれない、アメリカ白人社会で成功して医師になった先住民オヒエサ (Ohijesa、英語名は Charles A. Eastman [1858–1939]) の回想録『或るスー族インディアンの少年時代の思い出』(1902、ドイツ語訳は1912) に着目して、両者の関連が検証されている。だがその眼目は両テキスト間の単純な照応の確認ではなく、双方の書き手における言語的・文化的同化——オヒエサにあってはアメリカ社会への、ユダヤ人カフカにあってはドイツ(語)社会への同化——の対比にある。前者が同化一世として父祖の伝統的生活を生き生きと想起できるのにたいし、同化二世である後者には、ユダヤ的伝統へ無媒介に回帰することはもはやできない。起源の回復をめざす道行き、すなわちシオニズム的な運動は、『失踪者』の場合、主人公が社会的顛落と放浪を重ねるというフィクションとしてしか表象されえないとするこの論文は、そこにユダヤ的小説としての性格を読み取っている。

複数民族都市プラハのドイツ（語）社会に生きたユダヤ人カフカにとってのユダヤ性——これは同じくプラハ出身のユダヤ系ドイツ語作家でもあったブロートの指摘以来の古い主題だが、世紀転換期のプラハ／ボヘミアの社会的文化的状況がさまざまな角度から明らかにされている現在、カフカ理解に不可欠のコンテキストとなりつつある。カフカを含むユダヤ系知識人たちが接していたユダヤ人に関わる言説が、ローカルな新聞・雑誌などから確認される一方、それらは彼の日記や手紙や創作メモのうちにはっきりと痕跡を残し、さらに比喩的表現あるいは寓意的形象として「文学化」されている。林寄「ユダヤ教徒像とユダヤ人問題」は、上記の『失踪者』論とともにそうした最近の研究状況を踏まえたものだが、『訴訟』の作品解釈という性格がより強い。論者は最初の審理の場面にでてくる法廷関係者たちの「集会 Versammlung」を、ギリシャ語を介した「シナゴグ synagoge」の読み替えと看破したうえ、ヨーゼフ・Kの罪 Schuld を「ユダヤ人としての責任」ととらえ、さらに『訴訟』の幾多の場面や人物をユダヤ的コンテキストへと積極的に接続させていく。たとえば、裁判所に強力なコネを持つ画家ティトレリのうちに、マルティン・ブーバーの戯画化された面影をみる読みには、カフカにおけるユダヤ性の問題を、当時のユダヤ系知識人の人的および言説ネットワークのなかで具体的に位置づけようとする論者のスタンスがよく示されている。

同様にユダヤ性の問題を視野に収めながら、むしろカフカの書く過程そのものに寄り添おうとしているのが小松紀子「バルナバス一家の挿話と1920年の作品群」である。同年のカフカ創作ノート、すなわち「1920年の原稿束 *Konvult 1920*」から1922年に始まる『城』へと連なる執筆活動全体に着目したこの論文は、共同体のうちに不可避免的に発生する権力性ないし力関係というテーマに向かい合うカフカが小さな物語に幾度も挑み、あるいは物語の萌芽を書きとめる過程を段階的に検証している。創作ノートの全容を提示した校訂版全集の丁寧な検討から浮かび上がってくるのは、いくつもの物語テキストのあわいに生成するテーマないしイメージの相関である。そうした相関はカフカ文学固有の多層性——巻頭の有村隆広「多層構造の文学世界」がその一端をベテランらしい筆致でとらえている——を湛える媒質というべきものだ。逆にいえば、この媒質を想定することによって、長編や中短編から日記や断章にいたるテキスト産出のプロセスの探求が可能になるのである。

上江憲治「もうひとつの「最期」」もカフカにとっての書く行為に光を当てるもので、『訴訟』圏内に属する短いテキスト『ある夢』を取り上げて、それが本来この長編の終結部に組み込まれるべきだと主張する。ヨーゼフ・Kの処刑を語る終章の言語表現じたいに、そうした結末にたいする作者自身の不本意な思いが表面化している、すなわち一種の自己言及的な表現となっているという指摘はきわめて興味深い。そうであればこそカフカは、『訴訟』のありうべき別の結末として『ある夢』も用意したという議論から、長編小説を書くことは彼にとってつねに揺れをとまなう営為だったことが見てとれる。

カフカの書く行為の背後で働いているであろうこのような心的メカニズムを参照項として作品を解釈する場合、焦点はなにより作者本人に向けられる。佐々木博康「娼館としてのポランダー氏邸」は、ニューヨーク郊外の屋敷を舞台にした『失踪者』第3章で主人公カールに降りかかる脈絡を欠いた出来事を「夢」のそれと同定し、性行為にたいするカフカ自身の不安のあらわれという観点から物語のディテールを読み解いてみせる。古川昌文「描かれるのは個人か社会か」もまた、『訴訟』の創作原理を「夢」ととらえ、裁判所を主人公が無意識のうちに排除している衝動や欲望の表出、ひいてはカフカによる自我の深層の探求とみなす。ただし、そうした排除の心的メカニズムは、現実社会における権力の抑圧メカニズムと類似しており、そこから『訴訟』を社会批判的な作品として解釈しうる余地が生じると説く。

他方、テキストをまずもってその内在的特質に照らして語るアプローチは『城』を扱った論文に顕著である。いったい『城』の主人公Kが村の因襲や城の官僚機構に敢然と挑む英雄的存在なのか、それとも定住地を得るためなら手段を選ばないエゴイストなのかは解釈の分かれるところだが、村上浩明「Kの戦い」はそうした人物像の変転をプロットに即して手際よく整理している。下蘭りさ「名前をめぐる」は、『失踪者』から『訴訟』をへて『城』にいたるあいだ主人公の名前が、その血縁的・地縁的ネットワークを失って抽象化する経過を追う。Kの一字にまで削ぎ落とされた『城』の主人公は、しかしそのアルファベットを通して、依然なんらかの過去を背負い、また村社会においてなにほどかを引き受けていくつもりがあるという読みは、とても示唆的だ。

ところで上述のKの人物像の変転がどこに由来するのかを問うとき、登場人物たちが次々に長広舌が振るうというこの長編の特異な構造を避けてとおること

はできない。木田綾子「枠物語として読む」は、ヨーロッパ小説の伝統的な技法である枠物語の構図を『城』、とりわけオルガの長大なひとり語りに見る。とはいえ祖型となる『デカメロン』などが備えていた、物語行為をとおしての気晴らし（娯楽）という性格はそこにはない。なにより、村内の状況を伝える枠内物語が相互に矛盾し、また外枠となる語りとの懸隔もいっこうに解消されないところに、カフカ的な枠物語の姿があるとされる。

村内の事情はおろか主人公の人物像も定まりにくいという『城』の特質は、虚構テキストのなかで出来事の「事実性」はいかに担保されうるかという問題でもあり、それは1950年代から検討されてきたカフカの長編における語りの視点の一貫性 *Einsinnigkeit*——小説の語りの視点が主人公の視点と一致しているという現象——の議論に直結する。野口広明「単一視点と複数視点」はこの現象をめぐる長い研究史を振り返ったうえ、*Einsinnigkeit* が作動しているにもかかわらず、読者が主人公とは異なった視角から物語世界を理解する契機を作中に認める。とりわけ直接話法や体験話法による登場人物たちの言葉のうちに、虚構テキスト内の「現実理解」をそのつどあらたに構成するよう読者に働きかけるダイナミズムをみる論者の指摘は、たいへん説得的だ。

これにたいし、登場人物たちのコミュニケーション行動に言語学的な検討をくわえるのが、西嶋義憲「レトリックとしての「お見通し発言」」「カフカ作品における対人配慮 (Politeness)」である。お見通し発言とは、対話場面において相手の意識内容を、二人称主語＋思考動詞 (*denken* など) という形式であらわす平叙文の発話をいう。論者はこのタイプの発話行為をカフカの長編に探り、発話者が相手にたいし優位を誇る場合と共感を示す場合とがあることを確認している。同じく対話場面で、相手の言動についてそれが友好的かどうかの評価をあらわす単語 *freundlich*, *höflich* およびその関連語の出現頻度から、コミュニケーション行動における「対人配慮」の度合いを推定すると、後年の作品ほどその度合いが低下する、すなわち日常世界では普通に見られる協調的な人間関係が希薄化する、という結論が導かれる。いずれも、長編小説における登場人物たちのやりとりの表現形態にミクロな分析の道をひらくものである。

私見では、今日、内外のカフカ研究でとりわけ目につくのは、ユダヤ性にかかわる議論である。この議論は、カフカをドイツ文学史のなかで評価するという枠組が強固だった時代には、周辺のトピックにとどまっていた。日記や手紙はともかく、作品中にはユダヤへの言及が見当たらないことも、そうした理解を後押ししていた。この状況に変化が生まれた要因のひとつは、本稿冒頭でふれた校訂版全集によって、作品と作品以外という区分をいったん外し、カフカのテキスト全体を見渡す作業が容易になったことである。他方、1982年に始まったこの新全集の編集は東側の体制転換と冷戦の終結、さらにはヨーロッパ統合の進展と時期を同じくしていた。その結果、あらたにアクセス可能になった多様な資料から、中欧ことにハプスブルク帝国のユダヤ系知識人が生きていた社会的文化的環境がより詳細に再構成できるようになった。当然、プラハのドイツ（語）社会に深く規定されたカフカの生活史も立ち入って再検証され、たとえばシュタハによる大部の伝記（Stach, Rainer: *Kafka*. 3Bde. Frankfurt a.M.: S. Fischer, 2002-14）として結実している。さらに、それまで自明のものとされてきた国民国家単位の、しかも厳格なジャンルの分画にもとづく芸術理解が後退して、むしろ文化の移動・越境・混淆の諸現象に光が当たるようになると、その担い手としてのユダヤ人の存在があらためて大きくクローズアップされて、現在にいたっている。ユダヤ性にかかわる言説を参照項とするカフカ研究の深化もまた、そうした動向のひとつのあらわれといえよう。

テキストとコンテキストとの往還のうちに文学研究の位置を定めるという方向性は、評者自身にとっても親しいものである。とはいえ、そもそもユダヤ文化と身近に接することがない日本の環境にあってユダヤ的コンテキストをかえって特権視し、「ユダヤがわかればカフカがわかる」＝「ユダヤがわからなければカフカはわからない」という短絡的な理解に陥ることがあってはならない。複数文化が接触するさいに生じる諸現象を普遍的なタームの媒介により理解するという作業が不可欠である。

他方、文学研究の世界の動向とは別に、カフカのテキストは今もって多くの読者を獲得し、文学のみならず絵画・舞台芸術・映像などの諸ジャンル、さらには広範なサブカルチャーの創り手にもインパクトを与えつづけている。また校訂版全集に依拠した新しい翻訳が、さまざまな言語ですすんでおり、日本にいたっては『変身』だけでも30種類近くの翻訳が世に出ているのも厳然たる事実である。

これらはけっして二次的な事象ではなく、むしろカフカという巨大な文学的・文化的現象そのものとみななければなるまい。

カフカ研究会による今回の論集は総じて、テキストに密着してその特質に迫ろうとする論考が多い。それはむろん文学研究の譲ることができない立脚点だが、テキストから離れたところに参照項を設定して思い切った読みをこころみるチャレンジングな議論がくわわれれば、本書の地平はさらに広がったことだろう。次代のカフカ研究者には、より大きな視野のなかで彼の文学を読み込み、さらに豊かな成果を挙げていただきたいと心から願うしだいである。

(みたに・けんじ 大阪大学人文学研究科教授)